少年院でのアーティスト・ワークショップの実践

2021-2023 年度ベネッセこども基金
「経済的困難を抱える子どもの学び支援活動」記録冊子

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

INTRODUCTION

NPO 法人芸術家と子どもたちは、1999 年に発足、2001 年から NPO 法人として活動を行っています。私たちは、家庭環境や障害の有無などに関わらず、すべての子どもたちにアーティストとの出会いの場を提供し、創造的体験を通して、 自分と他者の良さや違い、多様性を認め合い、豊かな関係をつくることを目指しています。

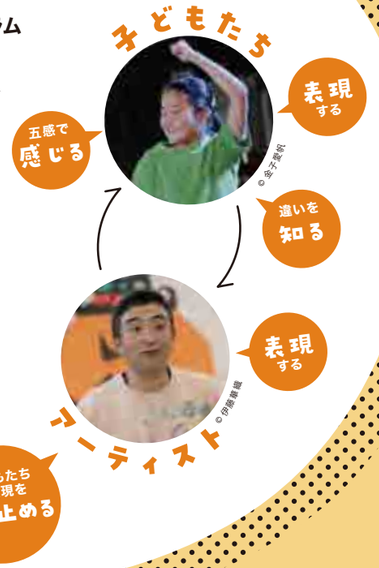
1 「芸術家と子どもたち」のアーティスト・ワークショップ

私たちが展開するのは、一方向の関係性による講習や鑑賞型プログラムではなく、コミュニケーションやプロセスを重視するワークショップ。アーティストと子どもたちや、子どもたち同士がお互いに刺激を受け、双方向の関係性を築きながら活動します。

ワークショップで子どもたちは、
音楽や身体的な触れ合い・手触り感など、五感を通じて、
様々な刺激をインプットし、身体感覚を研ぎ澄ませていきます。
その結果としてアウトプット（表現）が生まれます。

アーティストは、子どもたちの「言葉を用いない些細な表現」をも、
しっかりと受け止め、音や身体を通して丁寧に返していきます。

こうした「承認される」ことや、
「自分がしたことを相手が受け止めて返してくれる」経験を
積み重ねていくことで、「自己肯定感」が芽生え、
安心の中で、人と信頼関係を築くことを体得していきます。



2 団体のこれまでの主な歩み

矯正教育の現場（2022 年～）
児童福祉の現場（2010 年～）
学校教育の現場（2000 年～）

年度	
1999	発足
2000	公立小学校での活動をスタート
2001	NPO法人化
2004	公立中学校、幼稚園・保育園等での活動をスタート
2005	特別支援学級での活動をスタート
2010	児童養護施設での活動をスタート
2015	特別支援学校、障害児入所施設での活動をスタート
2019	子どもの居場所（子ども食堂等）での活動をスタート
2020	ファミリーホーム、養育家庭との活動をスタート
2022	少年院「東日本少年矯正医療・教育センター」、児童自立支援施設「神奈川県立おおいそ学園」にてアーティスト・ワークショップを実施
2023	少年院「東日本少年矯正医療・教育センター」・「宮川医療少年院」、児童自立支援施設「国立武蔵野学院」にてアーティスト・ワークショップを実施

3 なぜ少年院なのか

2000年、私たちは様々な境遇にいる子どもたちにアーティストと出会ってほしいという思いから、公立小学校の授業の枠組みで外部講師としてアーティストがワークショップをする活動を始めました。

普段、劇場や美術館などに行かない、文化的な体験の乏しい子どもにこそ、アーティストに出会ってほしい。創造的で刺激的なワークショップを体験してほしい。実施してみると、いつもは落ち着きがなかったり集団での活動が苦手な子どもたちが活き活きと自分を表現し友達とコミュニケーションをとる姿が見受けられました。

そして普段の学校生活で問題行動を取ってしまいがちな子どもには、複雑な家庭環境や独特な発達特性など、それぞれ背景があることもわかってきました。そこで私たちはこのようなアーティストワークショップを、（本人やまわりの大人は認識していないが）より切実に必要としているのはどんな子どもたちなのか、を考えるようになり、発達障害傾向があったり、虐待を受けた経験があったり、家庭や学校に居場所がないような子どもたちにこそ届けたいと考え、障害児教育や福祉の現場に多く通うようになりました。

やがて私たちにとっては自然に、あるいは必然的に少年院に目が向くようになり、まずは少年院がどんなところでどんな子どもたちがそこにいるのかを知るべく、様々な関係者にヒアリングしたり勉強会を開催したりして、きっと私たちにできることがあるに違いないと思うに至りました。

4 少年院でのワークショップが実現するまで

2022/6/21
法務省矯正局少年矯正課訪問
…当団体の活動紹介及び少年院の紹介依頼

2022/7/12
東日本少年矯正医療・教育センター（以下、センター）初訪問
…施設見学・ヒアリング及びワークショップ実施交渉

2022/8/14
センターの教育調査官・向井先生が当団体の児童養護施設ワークショップを見学

2022/9/18
センターの法務教官・北村先生、原田先生が当団体の児童養護施設ワークショップを見学

2022/10/13
センターでのワークショップ実施が確定

2022/11/18
セレノグラフィカ（ダンスカンパニー）を連れてのセンター見学・打合せ

2022/12/19
ワークショップ内容についてやりとりを重ね…初回ワークショップ実施

※2021 年度以前の活動については、15 頁をご覧ください

ABOUT

少年院とは？
少年院にいるのはどんな子どもたち？

少年院は、家庭裁判所から保護処分として送致された少年に対し、その健全な育成を図ることを目的として、矯正教育や社会復帰支援等を行う全国 44 カ所（※令和６年３月１日現在）にある法務省所管の施設です。

おおむね 12 歳から 20 歳までの少年を収容しています。

また、犯罪的傾向の進度や心身の著しい障害の有無などにより、第 1 種から第 5 種までの種類があり、各少年院には、矯正教育の重点的な内容と標準的な教育期間を定めた矯正教育課程が設けられています。

※少年院では、性別問わず、在院者のことを「少年」と呼びます。
※法務省ホームページ（https://www.moj.go.jp/kyousei1/kyousei_kyouse04.html）及び
法務省矯正局『明日につなぐ　少年院のしおり』の資料をもとに作成

保護処分の流れや、
少年院の種別の詳細について
知りたい方はこちら

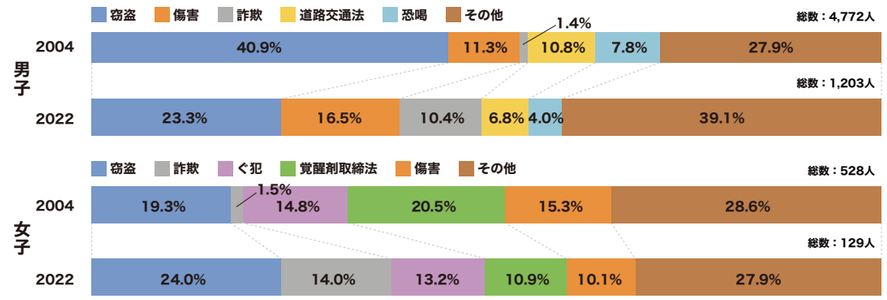
法務省 HP

DATA

少年院にいる子どもたちの現状

非行名

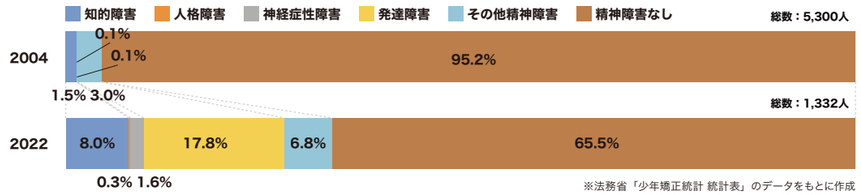
「詐欺」については、特殊詐欺などの新しい犯罪に巻き込まれる少年が増えているなど、時代の特徴がみられます。また、女子は覚醒剤取締法違反の割合が多いなど、男女によっても特徴が異なります。また、少年院に入院する少年の数は、男子・女子ともに年々減少傾向にあり、2004 年に比べて 2022 年は約 1/4 程度となっています。



※法務省「少年矯正統計 統計表」のデータをもとに作成
※2022 年統計表上の「年次別 新収容者の非行名」上位 5 項目の割合を図式化

発達上の課題

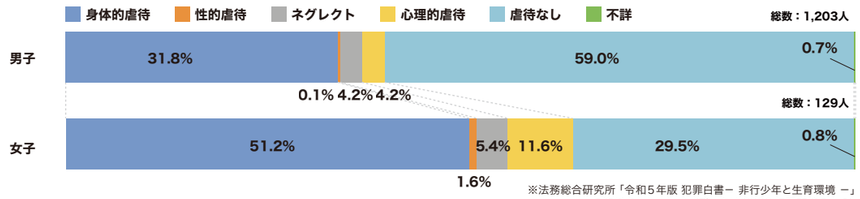
発達上の課題がある少年については、この２０年弱で大きく割合が増えていることが分かります。こちらは、「障害がある」と医師からの診断が出ている少年の割合となるため、「診断は出ていないけれども、発達上の課題がある」という少年も多く存在しているのではないかという声もあります。



※法務省「少年矯正統計 統計表」のデータをもとに作成
※2004 年調査時には、「発達障害」の調査項目はなし

被虐待経験

男子、女子ともに、被虐待経験がある少年の割合は年々増加傾向にあります。特に女子については、少年院にいる 3 人に 2 人以上の少年に被虐待経験があるという結果になっています。さらに、こちらの調査も本人への聞き取りによるものであるため、本人が認識していない場合や、性虐待については口に出したくない少年、あるいは忘れるようにしている少年などのことを考えると、実数はもっと多いのではないかと考えられます。



※法務総合研究所「令和５年版 犯罪白書－ 非行少年と生育環境 －」
の資料をもとに作成（データは 2022 年調査時のもの）

WORKSHOP

2022 年度、東京都昭島市にある少年院、東日本少年矯正医療・教育センターにて、芸術家と子どもたち初めての「少年院でのアーティスト・ワークショップ」を実施しました。

ワークショップ実施概要（2022 年度）

実施施設	：	東日本少年矯正医療・教育センター（東京都昭島市）
アーティスト	：	セレノグラフィカ（ダンスカンパニー）
実施期間	：	2022 年 12 月に 2 回、2023 年 2 月に 2 回　全 4 回各 60 分実施
参加者	：	医療措置課程に在院する 14 歳～ 20 歳くらいの女子 15 人（各回 10 名程度ずつ参加）

ダンスで自己紹介

子どもたちからの感想

「お二人のダンスがとても素敵だった。こんな動きができるのかと感動した」

リクエストウォーク

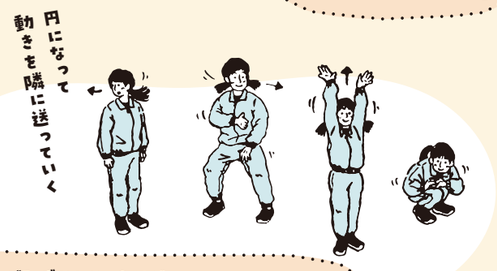
パンパンエイト

「体をなぞってすごくリラックスできた」

ダンスの手洗いうがい

「普段、体がこわばっていたんだなーと気づいた」

ウェーブトライアル



「ポーズをするのが恥ずかしかったけど、みんな楽しそうにやっていたので、楽しんでいいんだと思えた」

歩いてみよう／ストップ＆ゴー

すんどめさわってぬけて

「手のひらを当ててすり抜けるという何気ない動きなのに、とてもきれいでダンスらしくて感動した」

ウェーブダンス

「自分がダンサーになったみたいだった」

そして最後に

2022 年度 12 月に 2 回、2 月に 2 回の計 4 回実施。各回 60 分ずつの実施で、すべての回に参加した子もいれば、入出院の関係でどちらか 2 回のみの参加の子もいました。子どもたち一人ひとりには、自分で考えた「ダンサーネーム」をつけてもらい、アーティストはそのダンサーネームで一人ひとりに声をかけながら、ワークショップを進めていきました。

毎回、「ダンスの手洗いうがい」と題した準備運動からスタート。自分の身体をさすったり、仰向けになったり、ゆったりとした曲の中で身体のこわばりを取っていきました。アーティストの動きを真似しながらリズムに乗って動くことや、「片手をあげたポーズ」など、簡単なルールの中で自分のオリジナルの動きやポーズをつくるなど、表現の引き出しを増やしていった子どもたち。ペアやグループのワークをしている時は、お互いに目を合わせ、息を合わせながら、楽しそうに身体を動かしてくれました。

これまで実施したワークを繋げると、いつのまにか 1 曲のダンス作品が完成！最後まで踊りきり、並んでお辞儀をした時の晴れやかな表情がとても印象的でした。

はじめは緊張している様子も見られましたが、「まほさん」「あびちゃん」のあたたかい人柄と、素敵な音楽に包まれながら、身体も心もほぐれ、少しずつそれぞれの「ダンス」を見せてくれました。

THE ARTIST'S VOICE
アーティストのこえ

©Ai Hirono

隅地 茉歩
ダンスカンパニー
セレノグラフィカ

©Ai Hirono

阿比留 修一
ダンスカンパニー
セレノグラフィカ

2022年度全4回のワークショップ最終回終了後、今回のワークショップについて、セレノグラフィカのお二人にインタビューをさせていただきました。

子どもたちとどんな時間をつくっていきたいか

久保田（芸術家と子どもたちスタッフ）：今までお2人には、学校や児童養護施設など、様々な場所でワークショップをしていただいているのですが、少年院という場所は初めてのご経験だったかと思います。全 4 回のワークショップ、どんな時間になったらいいなと思われながら、ワークショップをされていたんでしょうか。

隅地：よく2人で大事にしようねって言っているのは、踊らせるっていうことが目的じゃないってことで。ダンスって目的じゃなくて、結果なので。何かしているうちに、気づいたら動いているとか、「あれ？最初億劫だったけど、もしかしたらこれってちょっと楽しいことなのかもしれない」…みたいなことを、ちょっとずつ感じていってもらえたらいいなとは思いました。他の学校や児童養護施設に行ったりしている時と、やっていることは実は共通のことも多くて、少年院用のプログラムを考えたっていうことでは特にないです。特定の子たちに対して、「これは無理やな」とか、「これ、できひんな」とか考えながらワークショップをしてしまうと、ファシリテートする側だけが地図を持っている感じになってしまいますよね。ひとまずやってみて、ちょっとお互いに上手くいかなかったら変えてみる…みたいに、子どもたちにも助けてもらいながら、一緒に場をつくっていきたいということはいつも思っているところで、それは今回も同じでした。

自分が今「少年院にいる」ということについて、それぞれ自分に対して色んなことを思っていると思うんですよね。「なんでこんなことをしてしまったのだろう」とか、「あの時ああじゃなかったら」とか。そういうことを全部一旦置いておいて、「小さかった頃の私」とか、「どこかにお出かけする前の私」とか、「愛おしいと思える自分」と、もう 1 回出会い直してもらえるような機会になったらいいなと思いました。彼女たちが社会の中でしてしまったことは、ある文脈の中では許されないことだと思うんですが、できたら自分の魂の部分まで否定せず生きていてほしいなと。魂と身体は直結してますからね。

阿比留：自分の身体って、案外無意識のうちに無理させたり、平気で傷つけたりしていると思うんです。僕自身もそうです。普段から平気で疲れさせたり、過度な負担をかけたりしていると、恐らく他者の身体にも同じような感覚になるのではないかという気がしていて。だからまずは「私には身体がある」ということに気づいてもらえるといいかなと思ったんですよね。自分の身体が「疲れている」とか、「つらい」ということに気づいて、こうすればちょっと元気になる…ってわかったら、きっと他者の身体のことも想像ができるんじゃないかなと。「私には身体があって、その身体を大事にしていいし、大事にしてもらってもいいんだ」って思ってもらえたらいいなと。少年院としてのルールもある中で、今回お互いに触れ合うワークはできなかったんですけど、本当は「触れられる」という感覚を彼女たちにもう 1 回取り戻してもらいたいと思っていました。優しく触れてくれる人もいるし、信頼がある人に触れてもらうっていうのは嬉しいなとか、そんなことに気づく体験になってほしいなと思っていました。

毎回必ず、自分の身体をマッサージする時間がありました。子どもたちの感想文には「心と身体はつながってるんだな」という言葉も。

「アーティストが少年院に行く」ということ

久保田：実際に少年院にいる子どもたちと向き合う中で、「アーティストが少年院に行く」という意味について、何か感じられたことなどはありましたか。

隅地：最終回の後の振り返りのときに先生（法務教官）が、「“ 近づいても大丈夫な手があるんだ ” って感じた子もいるのでは」って話してくれましたよね。あの言葉は物凄く心に刺さりました。最終回にやった「さわってぬけて」のワークは、初回ではなく何度もワークを重ねてから実施したからこそできたんだ…と。4 回のワークを重ねていく中で、「この手は、近づいても大丈夫な安心できる手なんだ」って思ってもらえたんだなというのは大きな学びでしたね。

相手のかざす手をすり抜けて、相手の身体に自分も手をかざしながらポーズを重ねていく「さわってぬけて」のワーク。

阿比留：彼女たちの中にある何かが見えたし、彼女たちも僕らの中にある何かを見てくれたなっていう感じがしました。「ダンスを教えてくれるアーティストさん」っていうのを越えて、「あびちゃん」「まほさん」として関われたというか。この時間の中では、普通に喋って、笑って、身体を動かして、「それ全然できてへんやん！」とか突っ込んだりして…ってことができそうだなと思いました。外部の人間が入る良さっていうのは、その時その場の環境を、こちらがつくってあげられるってことですよね。普段、施設内では守るべき生活規則みたいなものがもちろんあると思うんですけど、「僕らと一緒に過ごす時間は、楽しくリラックスしてていいよ」って。そういうある種の「特別な空間」をつくれるのは、もしかしたら毎日一緒に過ごしている先生たちには難しくて、外部から来ている人間だからこそできることなのかなと。

お二人の軽快なやりとりに、子どもも大人も思わずクスッとなりながら、いつのまにか身体も心もほぐれていました。

隅地：今日施設の中で、「再犯させない」っていうポスターを見たんです。これは本当に大事なことだなって思ったんですよ。この施設の先生方が一丸となって取り組んでおられるのはこれなのだろうなって。「再犯させない」ということを逆に、子どもたちの立場から考えるならば、再犯しないで済むにはどんなことがあったらいいのかを探すことかなって。管理を徹底して「再犯したらダメだぞ！」っていうアプローチもあるとは思うんですけど、自分の中から何かが少しずつ溶けていって、「こういう自分でいたい」って心から思えるような自分に出会うプロセスもあると思うんですよね。後者のようなプロセスを私たちは大事にしたいと思いますし、社会の中でもそこを想像して共感してくれる人が増えるといいなと思いますよね。

阿比留：子どもたちにとっても、「君たちのために来たぞ！」っていうより、「僕らが来たかったから来てみたよ～」ぐらいの方が喜んでくれたりするのかなと思ったりしますよね。ダンスのステップを覚えてもらうわけでもないし、何かこの振付を一緒に踊るよっていうことじゃなく、もっともっと自分の身体を知ったり、動いてみたりする中で、「ものすごいダンスやってるやん！」みたいになる。僕らができることは、制度や規則から一旦離れた時間をどれだけ提供してあげられるかってところで。だからこそ、子どもたちが自然に発する言葉、自然に出てくる笑顔が一番の喜びですし、そのためにこれからもこういう活動を続けていけたら嬉しいなと思っています。

インタビューの全文はこちらから

THE TEACHER'S VOICE

法務教官のこえ

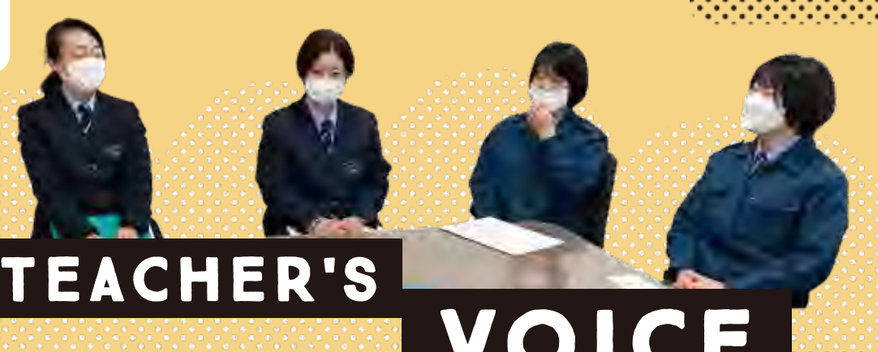
2022年度全4回のワークショップが終了してから
1週間後、今回のワークショップについて、
受け入れてくださった時の思いや
実際にワークショップに立ち合っての感想など、
法務教官の先生方にインタビューをさせていただきました。

向井先生

「少年院」は様々な制約がある場所なので、「自由」というイメージがある芸術の良さを、本当にこの場所で活かせるのか?という心配はありました。ただ、いずれ社会に出ていくということもあって、少年院にいる間から、子どもたちが外部の方と接する機会をつくることは大事だなと思っています。少年院はここを一つの社会として色々なことを勉強しているようなところでもあるので、外部の方にも入っていただきながら、「色んな人が応援してくれているんだな」とか、「色んな仕事をしている人たちがいるんだな」 みたいなところを感じてもらえる機会にできたらと考えました。

彼女たちが書いた感想文を見ると、本当に一つ一つのことについて、一生懸命受け取りながらやっていたんだなというのが伝わってきて、我々職員なんかよりもずっと、まほさん、あびちゃんの思いをしっかり受け止めて参加してくれていた子が多いのではないかと思います。人の心の動きに敏感な子も多いので、お二人のそういった気持ちが子どもたちに伝わったからこそ、上手くいった、楽しくやれたのではと思います。

音楽もバラエティーに富んでいて、「プロが本気で選んでます」って感じがとても印象的でした。我々が片手間に選ぶのとはやはり違いますよね。子どもたちの何気ない動きの中で、素敵な音楽が流れる…もうそれだけで「ダンス」だなって思いました。



北村先生

自分をなでたり、マッサージしたりする時間がありましたよね。あれはすごくいいなって思いました。普段の少年院のカリキュラムの中にはないですし、子どもたちも「これ気持ちいいな」って思ったら、個室で自分でもできる。「運動しましょう」ではなく、「楽しく身体を動かしながら、自分をいたわる」という感じは子どもたちにとっても良かったのかなと思います。

やはり子どもと正面で手を合わすくらいの至近距離で接することがあまりないので、子どもも最初戸惑うかなと思ったんですけど、意外と楽しそうにやってました。人によって手の距離は違いましたが。この子はやっぱりちょっと遠いな〜って子もいれば、手が触れるぐらいの距離でやっている子もいて。人の背中についていくワークも面白かったです。みんなすごく積極的にワーッて楽しそうに素早く動いているのが印象的でした。

普段やらないようなワークもあったので(私自身、子どもたちと一緒に動くときは)少し戸惑いましたが、職員の人間らしさみたいなところも出せたのは良かったかなと思います。

お二人のダンスを見せていただくと、ご本人たちが自分の身体をいたわっているのが伝わるし、そういう姿を子どもたちに見せてくれたのがまずありがたいなと思いました。ウォーミングアップから何からすべてのワークが、「自分の身体の感覚に気づく」ということを大事にされていたのがとても良かったなと。自分の身体と向き合うという意味では、マインドフルネスを実施している少年院はありますが、今回はさらに「人と呼吸を合わせる」とか、「人の手をちょっと許す、受け入れる」というのも入ってきていたのが印象的でした。

向かい合ったときに照れたように笑う姿とかは印象的ですよね。うふふっていう。普段の生活の中でも、そういう場面がない訳でもないんですが、単純にかわいらしいですよね。ワークショップ中は表情があまり出ていなかった子も、感想文は心豊かに書いていて、そうした彼女たちの色々な姿が見られて面白かったです。

原田先生

特に、自由に歩いて、すれ違う時にハイタッチのような動作をするワークは、子どもたちがみんなすごく笑顔で、楽しそうにやっていたのが印象的でした。普段子どもたち同士で近い距離で関わる機会がほとんどないので、子どもたち自身、色々と感じることも大きかったのかなと思っています。

誰かと楽しい時間を共有することはすごく大事なことだなと思っていて。特に、これから社会に出ていく上で、今回のように、言葉がなくとも相手と通じ合う経験ができたというのは大きかったのではないかなと思います。もちろん人間なので嫌いな子がいたり、嫌いな先生がいたりもあると思うんですけど、普段とは違うやりとりの中で、「あ、別にこの人、全然平気じゃん」みたいに思えることもあったのかなと。

高塚先生

インタビューの全文はこちらから

子どもたちの感想

毎回のワークショップ後、子どもたちには感想文を書いてもらいました。
可愛いイラストを添えてくれたり、丁寧な文字と言葉で伝えてくれたり、
子どもたちが心豊かに今回のワークショップを受け止めてくれている様子を感じました。

気持ちが穏やかになりました。

お二人のダンスがかろやかでまろやかで素敵だった。

心と体はつながっているんだなと感じた

小さな動きにも自分の気持ちや考えがあらわれるのだなと思った。

寮の先生たちがはっちゃけていて面白かった。

心が軽くなるような感じだった

スキップしたり、リズムをとったり、少し恥ずかしいけど気持ちよかった。ぽかぽかした。

ちょっとだけアイドルになったつもりで、美しくなったつもりで楽しめました。

体にふれるギリギリでとめるゲームでは、ふれられているわけではないのに、不思議な感覚がしたのがおもしろかった。

自分が歓迎されている気分で、恥ずかしいけれどうれしい気持ちになりました。

満たされていくようなあたたかさを感じたり、心の落ち着きを感じた。

ゆったりした動きに穏やかな呼吸をあわせると、身体のなかで何かが流れている感覚になった。

明日が最後かぁ～悲しいなぁ～＞＜

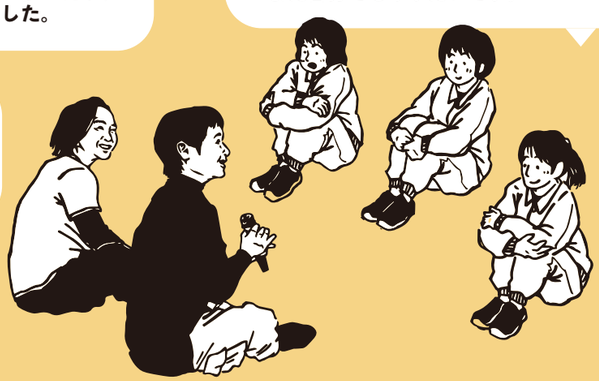
心臓がだんだんとゆっくり戻っていくのがはっきりわかった。（集中できていた）

またダンスがしたいです。そして、またあびちゃんとまほさんのダンスが見たいです。
私、いつまでここにいられるか分かりませんが、また来てください！！待っています。

真似したり、お客さんに見てもらったり、ランウェイみたいに歩いたり、周りを見るのも楽しめました。

目ざめのポーズを教えてもらったので、また自分でもやりたいです。

最後に、みんなで今までやってきたことを通してやったことが、一番楽しかったです。



MESSAGE

「少年院でアーティスト・ワークショップを」という私たちの想いに共感し、
少年院と芸術家と子どもたちを繋げてくださった、
法務省の山本宏一さんよりメッセージをいただきました。

「反省とアートって・・・・」

法務省矯正局少年矯正課 課長　山本 宏一

その昔、反省だけなら何とやらという CM がありました（年代的に、知っている人はきっと少ないかも・・・）。
「少年院って、悪いことした子が反省する場所だよね？」
「もちろんそうです。」

少年院は、少年たちがこれまで過ごしてきた社会に比べれば、驚くほど不自由な世界ですし、自らが行った非行に真摯に向き合わせるために日々、私たちは、少年たちに向き合っています。
「反省とアートって関係あるの？すごい遠いんじゃね？」
「遠い子もいれば、近い子もいます。」

少年たちは、非行に陥った経緯、資質、家庭環境、生活環境等、すべて異なります。多くの少年たちは、加害オンリーではありません。ある時は被害者、ある時は加害者と、加害と被害の間を行ったり来たりしています。その中で傷つき、怒り、虚無感、絶望、様々な感情が渦巻く中で少年院に来ます。最たるものが「大人への不信感」ではないかと思います。

少年たちは、世の中に対して、大人に対して、不信感という強固な「鎧」を身に纏い少年院に来ます。「鎧」を身につけたままの少年に、大人からの「反省しろ！」という言葉は届くでしょうか？「鎧」を身につけたまま口にする反省の言葉に意味はあるのでしょうか？

私たちは、まずは、少年たちが、この「鎧」を脱いでくれることに全力を注ぎます。少年院が彼らにとって、誰からも危害を加えられない「安全で安心な場所」だと感じてくれること、「信じてみようかな・・・」と思える大人だっていると感じてくれること、すべては、ここから始まります。

「鎧」を脱いだ少年たちは、様々な想いを先生にぶつけてきます。私たちは、その声から逃げず、向き合い、一緒に考えていくことで、複雑に絡み合った感情の糸を一つ一つ丁寧にほどいていきます。

想いを伝えることで自分の気持ちが整理でき、理解できると、周囲のことが見えるようになってきます。先生のこと、一緒に生活している仲間のことが見え、そして、自分が行ってしまった非行のこと、非行によって傷ついた人がいるということが、心から見えてきます。

自分の想いを伝えることが苦手な少年もいます。暴れることで伝えようとしたり、あるいは緘黙になったり、社会では非行が感情表現の代わりであったのかもしれません。

想いを伝える手段は、何も言葉だけではありません。絵、ダンス、製作・・・いろいろな方法があります。アートが一番の近道な少年もいるのです。

私は、芸術家と子どもたちの皆様からのお話に、一も二もなく飛びついてしまったという次第です。

先日、宮川医療少年院でのアーティストワークショップに私も参加しました。彼らの言葉ではない表現方法の多様さに驚きましたし、何よりも、ワークショップ終了後、ある少年の「できたら、また来てもらえるとうれしいし楽しそう」という言葉に、芸術家と子どもたちの皆様と出会えて良かったと確信しました。

ところで、「鎧」を脱いだ少年たちは、ある意味「無防備」でもあります。少年院の中ならば無防備でも大丈夫ですが、無防備のまま社会に戻ったらどうなるでしょう。

現実社会の中で、きっと、新たな「鎧」を身に付け、新たに誰かを傷つけてしまうことになるでしょう。

少年院を出る前に、無防備な彼らに、「鎧」をつけなくてもいい「何かの力」を持たせてあげたい。

心からそう思います。

それが何の力なのか、私自身、これだ！と確たるものを未だ言えません。一人一人違うのかもしれません。

芸術家と子どもたちの皆様と少年たちとのかかわりの中で生み出される「何か」が、きっと、その「何かの力」を身に付けるきっかけとなるはず！と言ってしまったら、芸術家と子どもたちの皆様にとってはプレッシャーでしょうか。

あらゆるものを可視化し、言語化し、評価し、位置付けるような時代となっているように感じます。でも、心は、どんなに頑張っても見えません。少年院は、この見えないものを修復し、育てることが必要な少年たちがいる場所です。アートには、その力があると思います。

芸術家と子どもたちの皆様との活動は、まだ始まったばかりです。一人でも多くの少年の心が豊かになるために、少年たちと一緒に歩んでいただけたら幸いです。

「少年院 × アーティスト」を模索した日々を振り返って

中学生の頃、私にとって「少年院」はそれほど遠くない存在でした。大人と子ども、子ども同士の傷つけ合いが日常的にあり、いつのまにか誰かを傷つけることでしか自分を守ることができない（と思い込んでしまう）環境がそこにはありました。何か「事件」が起こると、いつも問題視されるのは、その「子」やその「家庭」だったけれども、目には見えないありとあらゆるパワーバランスやヒエラルキーの中で、なんとか「生きている」私たちの必死さと、無機質な社会の常識やルールとの温度感の違いに、いつもどこか違和感がありました。

芸術家と子どもたちの活動に関わるようになった私は、子どもたちの剥き出しの表現を、全力で（時に繊細に）受け止め、同じ熱量で返していくアーティストがつくる場に、確かに「生きている」者同士のやりとりを感じ、なんだか不思議な安心感や心地良さを抱きました。「中学の時に出会った「あの子」や「この子」は、こんな時どうしただろう？どんなダンスをして、どんな作品をつくっただろう？」…いつも頭の片隅にあったそんな興味が沸々と膨らみ続け、今回の少年院での活動に繋がっていきました。

しかし「少年院にいる子どもたちの表現が見てみたい！」だけで、ことが進む訳もなく。そこには必ず活動の「目的」や「効果」が詳細に求められ、そのことを何度も尋ねられましたし、考えました。あまりに尋ねられ過ぎて、色んな文献を漁りながら「アーティスト・ワークショップが脳に与える良い影響」を数値化できないか…みたいなことを模索していた時期もありました。（もちろん、それはそれで非常に興味深い研究なのですが。）

結果、「自己肯定感の向上」や「他者との信頼関係の構築」といった言葉にまとめてお話しすることが多かったのですが、そうした言葉だけでは表現できない「何か」がアーティスト・ワークショップにはあると思っています。

今回の少年院でのアーティスト・ワークショップが実現した背景には、言葉での交渉だけではなく、その「何か」を共有してくださった方々がいたことが、何より大きかったように感じています。

「少年たちは、世の中に対して、大人に対して、不信感という強固な「鎧」を身に纏い少年院に来ます」という13頁の山本宏一さんの言葉に、私も心当たりがあります。自分を傷つけるかもしれない相手や社会を前に、「鎧」を纏わないと生きていけない時があったし、それは分断や格差が広がる今、子どもだけでなく、大人も同じなのではと感じます。特に大人の「鎧」は、「親として」「指導者として」「大人として」、時に権力性を帯びた姿で子どもたちの前に現れ、自分たちの弱さを隠します。そんな「鎧」を被った大人だらけの社会で、子どもたちは安心して「鎧」を脱げるのでしょうか。

芸術家と子どもたちでご一緒しているアーティストの皆さんは、「アーティストとして」何か指導しようとか、教えようということではなく、今回で言えば「まほさん」、「あびちゃん」として、子どもたちの前に存在してくれます。「ちょっと恥ずかしいな」とか「あまり気が進まないな」とかいう気持ちもひっくるめて見せてくれる子どもたちの表現に対し、その創造性の奥深さと表現の幅広さで、一緒に動き、考え、「何か」を生み出してくれます。そこには常に対話（言葉だけではない）があり、相手を知りたいという気持ちがあり、ある意味すべての「鎧」を脱いでそこに存在してくれているのではないかと思います。それは、常に社会と自分との関係性を見つめ、考え、表現として発信し続けている彼らだからこそ成せることなのかもしれません。そんなアーティストとつくる場だからこそ、子どもも大人も、安心して「鎧」を脱ぎ、自分を表現し、相手を受け入れることができるのではないでしょうか。

改めて、12頁の子どもたちの感想を読んでみてください。言葉がすべてではないですが、そこには確かに心が動き、子どもたちの中に「何か」が生まれた瞬間がありました。一人ひとりの照れた笑顔や優しい指先が、昨日のことのように思い出されます。そんな瞬間を共につくってくださったすべての皆様に感謝申し上げると共に、子どもたちがくれたこの言葉たちを力に、これからも活動を続けていきたいなと強く思います。

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち
久保田 菜々子

少年院等でのワークショップに関する活動実施データ

（ベネッセこども基金の助成は 2021〜2023 年度）

2019 年度

少年院や少年鑑別所で活動する保護司や篤志面接委員へのヒアリングを実施。
（＜助成＞公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京）

2020 年度

『「分断」から「共生」へと導く社会づくり』をテーマに、オンライン座談会を開催し、その様子などをコラムにて発信。

実施日 2020 年 8 月 8 日
登壇者 山本ゆかり（リトミック講師・篤志面接委員）
山本一乃（篤志面接委員）
新井英夫（体奏家・ダンスアーティスト）
寄稿 塚越明夫（篤志面接委員・保護司）

座談会　寄稿

（＜助成＞公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京）

2021 年度

少年院に関わる NPO 団体や研究者へのヒアリングを実施。公開オンライン勉強会「少年院にいる子どもたちの現状と課題を学ぶ」を開催し、その様子などをコラムにて発信。

実施日 2021 年 12 月 21 日
登壇者 ※肩書はいずれも当時
中島学（法務省札幌矯正管区長）
山本宏一（法務省矯正局少年矯正課企画官）
新井英夫（体奏家・ダンスアーティスト）

2022 年度

児童自立支援施設「おおいそ学園」にてワークショップを実施し、その様子をコラムにて発信。

アーティスト 鈴木ユキオ（振付家・ダンサー）
実施期間 2022 年 10 月〜 2023 年 1 月
※月 1 回程度、全 5 回各 50 分（最終回のみ 100 分）実施
参加者 おおいそ学園で暮らす小学 4 年〜中学 3 年生の男子 24 人

少年院「東日本少年矯正医療・教育センター」にてワークショップを実施し、その様子をコラムにて発信。

アーティスト セレノグラフィカ（ダンスカンパニー）
実施期間 2022 年 12 月に 2 回、2023 年 2 月に 2 回　全 4 回各 60 分実施
参加者 医療措置課程に在院する 14 歳〜 20 歳くらいの女子 15 人（各回 10 名程度ずつ参加）

2023 年度

少年院「東日本少年矯正医療・教育センター」にてワークショップを実施。

アーティスト セレノグラフィカ（ダンスカンパニー）
実施期間 2023 年 7 月に 4 回、2024 年 2 月に 4 回　全 8 回各 60 分実施
参加者 医療措置課程に在院する 14 歳〜 20 歳くらいの女子 11 人（各回 7 名程度ずつ参加）

児童自立支援施設「国立武蔵野学院」にてワークショップを実施。

アーティスト 鈴木ユキオ（振付家・ダンサー）
実施期間 2022 年 12 月〜 2023 年 2 月
※月 1 回程度、全 3 回各 90 分実施
参加者 国立武蔵野学院で暮らす中学 1 年〜高校 1 年生の男子 28 人

少年院「宮川医療少年院」にてワークショップを実施。

アーティスト 水内貴英（美術家）
実施期間 2024 年 1 月に 2 回　各 90 分・120 分実施
参加者 支援教育課程に在院する中学 1〜3 年生の男子 11 人

（※当日の様子は、2023 年度中に当団体 HP にて紹介予定）

シンポジウム「少年院 ×アーティスト」〜矯正教育におけるアーティスト・ワークショップの可能性〜を開催。

実施日 2024 年 1 月 14 日
会場 IKE・Biz としま産業振興プラザ
登壇者
山本宏一（法務省矯正局少年矯正課 課長）
向井信子（元・東日本少年矯正医療・教育センター教育調査官 ／現・法務省大臣官房会計課）
北村靖子（東日本少年矯正医療・教育センター統括専門官 法務教官）
隅地茉歩・阿比留修一（ダンスカンパニー セレノグラフィカ）

（※当日の様子は、2023 年度中に当団体 HP にて紹介予定）

芸術家と子どもたち
CHILDREN MEET ARTISTS

私たちの活動に賛同し、協賛・助成・寄付といった形で支援していただける企業・財団・個人の方をお待ちしています。ご関心をお持ちの方は、ぜひ事務局までお問い合せください。

NPO 法人芸術家と子どもたち

〒170-0011 東京都豊島区池袋本町 4-36-1 旧文成小学校 2 階
TEL：03-5906-5705　FAX：03-5906-5706
mail：mail@children-art.net
HP：https://www.children-art.net/

公式HPはこちら

発行日：令和 6 年 3 月 1 日
発行者：特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち
編集・デザイン：ムラハタワークス
イラスト：中村 理

※無断転載・複製を禁ず。

公益財団法人 ベネッセこども基金